

特集 CRC をめぐって

『がん臨床試験のプレイクスルー：まず基盤から 第1回 CRCの明日を考える』セミナー記録

【CRCの立場から明日を考える】

座長から：CRCの“やる気”を考える

国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院臨床研究コーディネーター室

中濱 洋子

がん研究会有明病院臨床試験支援部

吉武奈緒子

CRCの現状は、多くの研究実施に素晴らしい貢献をしている一方で、複雑化する研究支援業務に迫られている。ここでは、忙しいながらも楽しそうにみえる本セミナー前半講師の森下典子氏、酒井隆浩氏、藤原典子氏を通して感じた、CRCの“やる気”について私見を述べる。

今回の講演では、講師から、自然と“やる気”が伝わってきた。その理由は、多くの問題に対して、だれかが何とかしてくれることを待つのではなく、自ら率先して行動を起こしてきた奮闘を、イキイキと楽しそうに述べているからである。

そもそも“やる気”とは、広辞苑で「物事を積極的に進めようとする目的意識」とある。つまり、目的を達成しようと思う熱意やモチベーション、そのために物事を進めようとする気持ちである。まさに、講師らが共通して述べている“思い”である。しかし、やる気は、まわりで起こる些細なことで左右され、思いどおりにいかないものである。ならば、どうしたら講師のような“やる気”がもてるのだろうか。

千葉智之の書で、やる気のメリットは楽しくなることであり、やる気ができる仕組みには次の4つの条件があると述べられている¹⁾。①報酬がもらえる（メリットがある）、②他人から褒められる、③やり方と結果が予測できる、④経験から楽しいとわかっている、とある。このうち、1つでもあてはまればやる気はでて、あてはまる数が多いほどよいとある。

CRC業務にあてはめてみると、たとえば、①研究支援を通して多くの患者に貢献できる、②患者や家族、関わる医療スタッフやモニターらと良好な関係が築ける、③協同し工夫をすることで安全で確実な研究実施ができる、④CRCとして充実した経験がある、などとなる。

さらに日常業務にあてはめてみると、たとえば、①忙しかったけれど、今日のビールは美味しかった、②同僚から「さすがだね」と言われた、③うまくスケジュールが組めた、④受け持ち患者の喜ぶ顔が頭に浮かんだ、などとなる。

このように、CRCのやる気が出る条件は、決して特別なことではなく、日常業務中や身近にあることがわかる。特に、患者やかかわる医療スタッフと共感を覚える出来事は、大きなやる気につながると考えられる。また、苦勞が多い時こそ、CRCどうして声を掛け合うことも、やる気がでるきっかけになるのではないだろうか。

やる気は、身近なうれしい出来事に気付くかどうかで左右されるということになる。講師らは、どのような時でも意識してアンテナを張り、小さな出来事をも見逃さずにやる気を維持していることで、苦しい時もイキイキと楽しくみえるのではないだろうか。その姿は、研究に参加する患者に安心感を与え、かかわる医療スタッフらとの信頼関係を生み、研究の安全な実施につながっていると考えられる。そうすることで、少しでも働きやすい環境になり、さらにCRCの仕事が充実するのではないだろうか。

これを書いている私自身は、忙しさに流され、ときどき挫けるCRCである。しかし、せつかく好きな仕事なのだから、何をするにも、同じやるなら楽しいほうがよい。今回感じた“やる気”を仲間と共有し、身近にあるやる気がでる条件に気付く意識をもっていきたい。

文 献

- 1) 千葉智之. やる気の大学. 東洋経済新報社; 2010. p.21-2. p.66-9.